

た如く、私を辱めた。そして時々エム夫人も、それに加はらずには居られなかつたが、私を臺なしにして、皆なが笑ひ出すと、絶望し、すっかり参り、私は私を苦しめる人を振り切つて二階へ走り去り、客間へ顔を出す勇氣も無く、私はそこにその日の残りを、只一人留つた。それでも、私は未だ私の羞かしさや、私の動亂の譯が分らず、全體の進行が、私の中に、無意識の中に進んだ。私はエム夫人にはやつと二語話したゞけだつた。

然し、或る耐ら無い日の後の或る晩に、私は他の連中と旅行から歸つて來た。私は恐ろしく疲れ、庭を横切つて歸つた。引つ込んだ並木道の或る席に私はエム夫人を見た。彼女は彼女がわざ／＼、この淋しい場所を選んだかの如く只一人で座し、彼女の頭は垂れ、彼女は彼女のハンケチを機械的に振つて居た。彼女はすっかり思案に暮れて居たので、私が彼女のところへ行く迄、彼女は私を聞き付けなかつた。

私に氣が付いて、彼女は速かに彼女の席から立ち上つて、振り返つた、そして、私は彼女が急いで彼女の眼を、彼女のハンケチで拭ふのを見た。彼女は泣いて居たのだ。眼を伏せて、彼女は私に向つて微笑み、私と一緒に家へ歸つた。私は私達が何の事を話したか覚えて居ないが、彼女は何ミか彼とか口實を作つて、屢々私を花摘みや、次の並木道を馬車に乗つて行く人は誰か見に遣つた。そして、私が彼女から歩み去ると、彼女は直ぐに又、彼女のハンケチを彼女の眼に當て、しつこく、彼女の心から何度も／＼湧いて、彼女の可哀相な眼から滴つた始末に行かぬ涙を拭ひ取つた。私が彼女が屢々

私を去らせたので、私は非常に彼女を邪魔して居る事を悟つた許りでなく、彼女も、私がすっかり氣が付いて居る事を分つたが、彼女は我慢する事が出来なかつた、そして、それが、一層、私の心を彼女の爲めに痛ませた。私はその時自分自身にむかつ腹が立ち、殆んど自棄つ腹に成り、自分の氣が利かぬ事、及び、智慧の無い事が自分乍ら呪はしく、而かも、同時に、私が彼女の悲しみに氣が付いたといふ事を露はさずに、どうしてうまく彼女を離れたらい、か分らず、悲しく當惑し、殆んど恐慌し、すっかり迷ひ、私達のはづまぬ會話を列べ立てる爲めに一言も見出す事が出来ずに、彼女の側を歩いた。

この會合は、私に非常な印象を與へ、私はその晩中、熱切な好奇心で、エム夫人に密かに注目し、私の眼を決して彼女から離さなかつた。然し、偶然にも、彼女は二度私が彼女に注目して居るのを突然見付け、二度目には私を見て、彼女は私に對して微笑んだ。その晩に、その時にだけ、彼女は微笑んだ。悲しげな様子は彼女の顔を去らず、それは今や非常に蒼白かつた。彼女は一晚中、誰も、彼女の探偵のやうな、陰口をいふ習慣の爲めに好まないが、誰も彼も恐がり、従つて誰も彼も餘儀なく彼女に丁寧にする意地の悪い、喧嘩好きな婦人と話して暮した。

十時に、エム夫人の夫が着いた。その時迄私は決して、私の眼を彼女の悲し氣な顔から離さず、彼女に注意深く注目して居たが、今や、彼女の夫が突然やつて來て、私は、彼女がびくりとしたのを見、彼女の顔はハンケチのやうに白く成つた。それは非常に明白だつたので、外の人々もそれに注意した。

私は途切れ／＼の會話を漏れ聞いたが、それから、私はエム夫人がすっかり幸福ではない事を察した、皆なが、彼女の夫は、愛からではなく、自惚から、亞刺比亞人の如く嫉妬深いといつて居た。先づ第一に、彼は、最も新しい知識の見本を示し、それを得意がつて居る歐羅巴人、近代人だつた。様子は、彼は脊の高い、髪の毛の黒い、特に頑丈な男で、歐羅巴人の頬髭を有し、自負的な、赧ら顔をし、砂糖のやうに白い歯をし、申分なく紳士的な風采を有した。彼は利巧な人と呼ばれた。それは、或る社會で、外の人々の出費で肥り、全然何にもせず、何をする慾望も無く、その心臓は、不變の無精と怠惰の爲めに脂肪の塊りに變つた特別な種類の人々に與へられた名前だつた。諸君は常にさういふ人々から、「彼等の天才を防げる或る『非常に込み入つた、敵意ある事情の爲めに、彼等が爲す事が出来るものは無く、』彼等の才能の浪費を見るのは悲しむ可きだ」といふ事を聞く。これは彼等の美しい文句、彼等のモ、ドールドル(譯者註、警句)彼等の警句、われ等の、これ等丈夫な友達が、しよつち中持ち出すので、それはすつと前に評判の僞信、空つぽな形式だけの語として私達を退屈させた文句だ。然し——實は彼等は決して、それを求めはしないが——何かする事を首尾よく見付ける事が出来なかつた、これ等、面白い連中の或るものは、彼等は心臓の代りに脂肪の塊りを持つて居るのではなく、その反對に、何か正確には、最大の外科醫も——勿論禮儀から、殆んど思ひ切つて決定しまいと思はれるが、非常に深いものを持つて居るといふ事を皆なに信じさせやうとする。これ等の人々は、彼等の全本性が下品な冷笑、先見無き非難、素敵な自惚の方に傾いて居るといふ事の爲めに出世する。彼

等は他人の過誤や缺點に注意し、誇張する事の外何もする事が無く、彼等には正しく牡蠣と同じだけの好感があるので、さういふ自己保存力を有する彼等には、人々を可成り巧くつき合つて行く事は困難ではない。彼等は大きいにそれを得意にして居る。例へば彼等は殆んど全世界が彼等に何物かを負ひ、それは、彼等が取つて置いてある牡蠣の如く彼等の物で、彼等の外は誰も彼も馬鹿で、誰も彼も彼等が汁が欲しいと直ぐに絞る蜜柑か海綿のやうなもので、彼等は何處でも主人で、この歓迎すべき状態はすべて専ら、彼等が非常に聰明で、立派な性格の人間だといふ事にもとづくと實際、確信して居る。彼等は限り無く慢心して、自分の如何なる缺點をも承認せず、彼等は、徹頭徹尾惡者で、遂に彼等は、それが正に然ある可きころのもの、即ち、彼等は彼等の生涯を不正に過す可きだと思ふやうに成り、彼等は、皆なに屢々、彼等は正直な人間だといふ事を確信させたので、彼等は、彼等が正直な人間で、彼等の惡戯は正直だと信じるやうに成つた彼の種類の實際的の惡者、生得のターチユフ(譯者註、モリエールの脚本ターチユフ)やフォールスタッフ(譯者註、シエークスピアの脚本、メリー、活にして)のやうである。彼等には決して彼等の良心の前での内的批評、寛大な自己批評は出来ず、彼等は肥え過ぎて居て、彼等には出来ない事がある。彼等の至つて貴い人格、彼等のバアル神(譯者註、古代フェニシア人が尊崇)にしてモーロツク(譯者註、同じくフェニシアのカナ)彼等の壯大なる我がしよつせし日神より偶像の意)にしてモーロツク(譯者註、同じくフェニシアのカナ)彼等の壯大なる我がしよつ中、何處でも出しや張る、全自然、全世界は、彼等には、小さい神が、自分の後ろには誰も何物をも見ず、しよつ中その中で、自分自身を崇める爲めに作られた素晴らしい鏡に外ならず、従つて、彼が

世界の萬物をさういふ恐ろしい見地から見るのは不思議でない。彼は萬事に語句——彼の才能の極點だが——最新流行の語句を持ち合せて居る。彼等が成功を嗅ぎ付ける考へをあらゆる十字街で布告して流行を作る事を助けるのは實際、正にこれ等の人々だ。立派な鼻とは正に、彼等が流行語を嗅ぎ付け、それを、他の人々が擱^おへる前に自分のものにし、それは彼等から初まつたやうに思はせる爲めに持つて居るもの、事だ。彼等は人類に對する彼等の甚深なる同情を布告し、博愛の最も正確にして合理的な形式は何かを定義し、ロマンチック主義、外の語でいへば、あらゆる立派で眞實なるもの、その一つ／＼の原子も、彼等の全軟體動物族よりも貴きものをしよつ中攻撃する爲めに語句の特別な貯へを有して居る。然し彼等は餘りに粗雑で、間接な、迂曲した、出来上つてない形式の眞理を認める事は出来ず、彼等は未だ醗酵しつ、あり、不定で、未熟なものは何でも斥ける。かういふ良く養はれた男は、彼の全生涯を安樂に過し、何も彼も貯へがあり、自分では何にもした事がなく、あらゆる種類の仕事が如何に艱難なるかを知らず、従つて、彼の遲鈍な感情をどうかして荒々しく搖かせやうなものなら、その人こそ災難だ、彼は決してそれを許さず、彼は始終それを覺えて居て、喜んでその復讐をするだらう。結局、われ等の主人公は正しく、ありとあらゆる種類の文章や、流行語や符牒で一杯な、巨大な、素敵にふくれた袋である。

とはいへム氏には特徴があり、非常に非凡な男で、彼は頓智があつて話上手で、談話家だつたのでどの客間でも、しよつ中彼の廻りには人が集つた。その晩彼は特に、或る感動を與へる事に成功した

彼は會話を占有した、彼は上機嫌で、快活で、何にか知らぬが喜んで居り、彼は皆なの注意を奪つた、然しエム夫人はしよつ中、彼女が病氣で、もあるかのやうな様子で、彼女の顔は非常に悲しげだつたので、私はしよつ中、涙が彼女の長い睫毛に震へ出すだらうと思つて居た。私が既にいつた如く、これが皆、私に酷く印象を與へ、私を驚かせた。私は一種不思議な好奇心を抱いて立ち去り、その時迄私は餘り夢を見た事は無かつたが、一晚中エム氏の夢を見た。

翌る日朝早く、私は、私も加はらねばならなかつた活人畫の稽古に招ばれた。活人畫、芝居、そしてその次に舞踏は全部、五日後——われ等の主人の妹娘の誕生日の同じ晩に定められた。殆んど俄作^{（譯者註、われ等）}りされたこの響應に、モスコウや附近の別荘からもう百人許りの御客を招いたので、大騒ぎ、雜踏、騒動が生じた。下稽古といふよりも、寧ろ衣裳の檢閲は、彼^{（譯者註、われ等）}の主人公を指すに對する好意から、活人畫の配置や、私達をその爲めに練習さすこゝを引受ける事を承諾した、私達の舞臺の監督で、有名な藝術家で、私達の主人の友達が、もう時が無かつたので、小道具を買つて、祝祭の最後の準備をする爲めに、今や急いでモスコウへ行かなければならなかつたので、朝非常に早くに定められたのであつた。私はエム夫人と一緒に或る活人畫に加はつた。それは中世の生活からの或る場面で、「城の婦人と彼女の近習」^{（譯者註、われ等）}と呼ばれた。

私は下稽古でエム夫人に會つて、名狀し難く問訊つた。私は彼女が直ぐに、前日來私の心中に生じたあらゆる思案、あらゆる疑ひ、あらゆる憶測を、私の眼の中に讀むだらうと感じ續けた。私は又、

前日彼女が泣いて居るところへ偶然出會はし、彼女の悲しみを妨げ、彼女が私を、彼女の秘密の不愉快な目撃者、許されざる分配者として、怪しげに眺める事を、やつと禁じる事が出来た位だつたので、私はいはゞ彼女の事で罪があると考へた。然し、有難い事に、大した面倒なしに終へた、私は全然気が付かれなかつたのだ。私は彼女は私や下稽古に考へを割愛しなかつたのだと思ふ、彼女は上空で、悲しげで、ふさぎ込み、思案に暮れて居た、彼女が何か酷い心配事で苦んで居る事は明かだつた。私の役がしまへると直ぐに、私は走つて行つて、私の着物を變へ、十分後には、ヴィランダ(譯者註、庭園等に向つた縁側)から庭へ出た。殆んど同時にエム夫人も、外の戸から出て來たが、すぐに又、彼女の自負せる夫も私達の方へやつて來た、彼は庭から、そこへ可成り澤山の婦人を警護して行き、そこで彼等を或る人に渡して直ぐに歸つて來るところだつた。夫と妻とのこの會合は明かに思ひ掛けぬものだつた。エム夫人は何故か知らぬが、突然周章し、當惑した、活氣なき微しが、彼女の顔に表はれた氣輕に口笛を吹き、深重な様子で、彼の頬髭を撫で、居た夫は今や、彼の妻に會つて眉を蹙め、私が今覺えて居るところでは、彼女をひどくぎよろく、凝視した。

「庭へ行くのか。」と彼は彼女の手の日傘と本に氣が付いて尋ねた。

「い、え、柴林へ」と、彼女は少し顔を赧らめていつた。

「一人かい？」

「此方と」とエム夫人は私を指さしていつた。「私はいつも朝一人で散歩しますの」と彼女は人々が、

彼等が初めて嘘をいふ時にする如く、はつきりせぬ、口籠つた聲で附言した。

「ふん。……俺は彼方へ皆なを連れて行つたところだ。エヌを送るので、皆な彼方の花の四阿に集つて居るよ。エヌは行くのだよ。ね……オデッサで何か間違ひが起きたのだ。お前の従姉妹(彼は彼の美しい人の事をいつて居たのだ)は、一時に笑つたり、泣いたりして居て、譯が分らない。だが従姉妹が、お前が何かで、エヌに腹を立つて、それで、あれの見送りにも行かないだらうといつて居たよ。勿論嘘だらう？」

「笑つて居ますよ」とエム夫人はヴィランダの階段を下りていつた。

「そして、これが御前のお小姓かい」とエム氏は、不愉快さうに微笑み、彼のロルネット(譯者註、長柄を私に向けて附言した)

「小姓ですつて！」と、私はログネットとその嘲弄とに腹を立つて叫び、面と向つて笑つてやつて、私はヴィランダを三段、一跳びに飛び下りた。

「ぢや散歩して御出で」ミエム氏は口の中でいつて、立ち去つた。

勿論私は、彼女が私を彼女の夫に指示するや否や直ぐ、エム夫人と一緒に成り、宛かも彼女が一時間も前に、私にさうしないかといつて招いたかの如く、又、宛かも、私はこの一月、毎朝、彼女の散歩の時に、彼女に付いて行つて居たかの如く思へた。然し私には、何故、彼女があんなに間違ひ付き、あんなに困つたか、それに、何を考へて、彼女は彼女の子供らしい嘘を用ゐる氣に成つたか分らなかつ

た。何故彼女は正直に、彼は一人で行かうとして居るといはなかつたのか。私は彼女をどう考へてい
いか分らなかつたが、私は漸次非常に無邪氣に彼女の顔を覗き込み出した、然し、一時間前、下稽古
の時と正に同じく、彼女は私の顔付きにも、私の無言の質問にも注意しなかつた。只一層緊切で、一
層はつきりとした、同じ心遣ひが彼女の顔にも、彼女の動搖にも、彼女の歩き方にも表はれて居た。
彼女は急ぎ、段々速く歩き出し、あらゆる並木道、庭の方へ通じる森の中のあらゆる小徑を不安さう
に見下して許り居た。それで、私も何物かを期待して思た。突然私達の後ろに馬の蹄の音が聞えた。
それは、エヌ、突然私達のところから去らうとして居る紳士を護衛する、馬に乗つた、婦人や紳士の
全體だつた。

婦人達の中には、エム氏が、彼女は泣いて居ると私達に語つた、私の美しき苦しめ手も居た。然し
特に彼女は子供のやうに笑ひ、立派な栗毛の馬を迅速に驅けらして居た。私達のところへ來ると、エ
ヌは彼の帽子を取つたが、止りもせず、エム夫人に一言もいはなかつた。間もなく、騎馬行列全部が
私達の見えるところから消失した。私は一目エム夫人を見て、すんでの事に、驚いて叫ぶところだつ
た、彼女はハンケチのやうに白く成つて立ち、大きな涙が、彼女の眼から湧いて居た。偶然私達の眼
が合つた、エム夫人は突然顔を赧らめ、一寸の間、顔をそむけた、そして、はつきり不安な、腹立し
い様子が彼女の顔を横切つた。私はこの前の時よりも邪魔をした、それは火よりも明かだつた。然し
如何にして、私は通れたらよかつたか。で、宛かも、私の困難を察したかの如く、エム夫人は、彼女

が手に持つて居た本を開き、赤面し、明かに、私を見ないやうにして、宛かも、彼女が今突然、それ
に氣付いたかの如くに彼女はいつた——

「おや！これは第二編だ。間違へて了つたのよ、第一を持つて來て呉れませんか。」

私は合點しずには居なかつた。私の役目は終つた、そして。私は此上無く速かに暇を貰つた。

私は彼女の本を持つて走り立つて戻らなかつた。第一編はその朝、卓子の上に、靜かに横つて居た。
然し、私は氣が氣でなく、私の心には、一種の恐怖が附き纏つた。私は極力エム夫人に會はないや
うに努めた。然し、宛かも今彼には何處か變つたところがあるかの如く、烈しい好奇心でエム氏
の自負した様子を視た。私には、私の馬鹿げた好奇心が如何なるものであつたか分らない。私は只、
私とその朝偶然見たもの、爲めに不思議に惱んだ事を覚えて居る。然し、その日はまだ初まつた許
りでそれは私に取つて事件に富んで居た。

正餐はその日は非常に早かつた。そこでやつて居る村祭を見る爲めの、近隣の小村落への遠征はそ
の晩に極まつて居たので、間に合ふやうに用意する事が必要だつた。私は三日前から、あらゆる種類
の楽しい事を豫期して、この遠足の事を夢想して居た。殆んど全部の連中が珈琲を飲みにヴィランダ
に集つた。私はつ、まじやかに他の人々の後に連いて、第三列目の椅子の後に隠れた。私は好奇心に
誘はれたが、而かも私はエム夫人に見られない事を非常に切望した。然し生憎私は私の美しき苦しめ
手から離れて居なかつた。何か不思議な、怪しい事がその日彼女に起つて居たので、彼女は倍美しく

見えた。私はどうして、何故、かういふ事が起きるか知らないが、かういふ奇蹟は、女には決して稀ではない。この時、私達と一緒に、或る新しい客で、脊の高い、顔色の青い青年で、私達の美しき人の表立つた嘆美者が居たが、彼は、風説に、彼はその婦人を必死に戀して居るといつて居たエヌの代りにざわ／＼成る爲めにかの如く、丁度モスコウから着いたところだつた。新しく着いた客はこれ迄長い間、シェークスピアの、から騒ぎの、ベネデイックとベアトリスと同じ關係だつた。手短かにいへば、彼の美しき人はそれは非常に上機嫌だつた。彼女のおしやべりと彼女の冗談とは非常に優美に充ち、非常に人を信用して無邪氣で、非常に罪無く輕快で、彼女は、非常に潔き自信で、皆なの熱中を信じて居たので、彼女はしよつ中、實際、特種な敬慕の中心だつた。一群の、驚嘆し、敬慕する聴き手がしよつ中彼女の廻りにあり、彼女はこれ迄かくも魅力があつた事は無かつた。彼女が語つたあらゆる語は不思議で、誘惑的で、引つ流はれ、集團の間を持ち廻られ、一語も、一つの冗談も、一つの洒落も失はれなかつた。私は誰も、彼女にこんな趣味、こんな技倆、こんな機智を期待した事は無かつたらうと思ふ。彼女の非常に良い性質は、普通、この上なく無鐵砲な氣儘、殆んど道化に近い、この上なく子供らしい惡戯の下に埋もれ、それ等は稀にしか認められず、認められても、殆んど信じられなかつたので、今や彼女の並外れた技倆には、驚きの熱心なる私語が皆なの間に伴つた。さあれ少なくてエム夫人の夫がそれに演じ、彼女の成功を助けた役で判断すると、或る特別な彼の熱情家は――私は、殆んどあらゆる人が、若くはあらゆる若い人々は満足したと附言しなければならぬが

――多分、彼女の見るところでは、非常に重大な原因の爲めに、敢て烈しく彼を攻撃した。彼女は彼に、諧謔、嘲弄的な、毒々しい洒落、彼の、表面は滑かに蔽はれ、被害者に捕へるものを何にも與へずに射中し、彼を怒りと、滑稽な絶望に陥らせて、攻撃を撃退せむとする無駄な努力の内に彼を疲らす、この上なく心を迷はし、奸詐的な種類の十字火を浴せた。

私は確かには分らないが、全體の行動は俄作りされたのではなく、前以て企てられたのだと私は考へる。この死物狂ひな決闘は、正餐時、早くから始まつた。私はそれを、エム氏が速かに降伏しなかつたが故に死物狂ひと呼ぶ。彼はすつかり汚辱で蔽はれない爲めに、彼のあらゆる沈着、彼のあらゆる鋭い機智、稀な堪能に訴へねばならなかつた。争闘には、目撃し、それに加はつたあらゆる人々の絶えざる、制し難き笑ひが伴つた。彼に取つて、その日は、前日と非常に異つて居た。エム夫人が何度も、嫉妬深い夫を、最も奇妙な、馬鹿々々しい扮装、多分さうだといふ點、私の記憶に残つて居るもの、及び最後に、私自身が、その事件に演ずる運命に成つた役から判断すると、かうどうしても想像されるが、「青髻」の扮装に盡かうと努めて居た彼女の無分別な友達を全力を盡して押し止めやうとした事は明白だつた。

私は非常に馬鹿々々しい工合に、全く思ひ掛せず、それに引き込まれた。そして、生憎、その時私は、禍ひを感付かず、事實私が長い間事とした川心を忘れて、私が見えるところに立つて居た。突

然、私は、エム氏の不倶戴天の敵、當然の競走者、それに就いては、私のいぢめ手が、ついその朝も彼

女が柴林に……居たといひ、彼女は證據を握つて居ると誓つて断言したが、彼の妻を必死に成つて居るものとして、表立つた位置に持ち出された。

然し彼女がいひ終る前に、私は、この上なく命懸けの瞬間に押し入つた。その瞬間はその大詰め、その滑稽な大團圓に漸次導びくやうに、非常に悪魔的に計畫され、非常に欺瞞的に準備され、非常に可笑しい滑稽を以て引き入れられたので、どつと許りに制し難き笑ひが、この最後のちやりを迎へた。そして、その時にも、私は私が、演技の最とも不愉快な役ではないといふ事を察したけれども、私は非常にうろたへ、非常に腹を立て、驚いて、苦痛と絶望に充ち、羞かしさと涙とで息せいて私は二列の椅子の間に突進し、前進し、私の苦しめ手に向ひ、涙と憤怒で弱つた聲で叫んだ。

「大聲で……皆な女の人が居る前で……そんないけない……嘘をいふ事は……羞かしくありませんか。……小さい子供のやうに……かうして皆な人が居る前で……皆なが何といひませう……あなたのやうに大きい人が……そして結婚して居る身で……」

然し私は續ける事が出来なかつた、耳を聳する賞讃の叫びが起つた。私が暴れ出した事は、完全な熱狂を拵へた。私の無邪氣な身振り、私の涙、殊に、私が、エム氏を擁護して居るかの如く思はれた事、これは皆、非常に悪魔的な笑ひを引き起し、今でも、私は、一寸その事を思ひ出すと笑はずには居られない。私は周章狼狽し、震駭で知覚が無く成り、羞かしさで熱し、顔を手で隠して、飛び出し、戸から入つて來た給仕人の手から盆を敲き落し、二階の自分の部屋へ飛んで行つた。私は戸の外にあ

つた鍵を取つて、鎖した。さうして宜かつたのだ、何故なら、追跡の叫聲が私を追つ掛けて來たから。一分と立たない内に、非常に綺麗な婦人のわい／＼連の爲めに、私の戸は攻撃された。私は彼等の聲高の笑ひ、彼等の絶えざる御しやべり、彼等の震えを帯びたる聲を聞いた。彼等皆なが、燕のやうに一度に囀つて居た。彼等は皆、彼等の一人々々が、一寸でい、から、戸を開けるやうに、私に乞ひ、願ひ、禍ひが私に懸りはしない、只、彼等は接吻を私におつかせ度いのだと誓言した。然し……この珍奇な脅嚇よりも何物か能く恐ろしくあり得たぞ。私は戸の此方の側で、すつかり羞かしさに燃え、私の顔を枕に隠し、開けもしず、應へもしなかつた。婦人達は、長い間、たゞく事を續けたが、私は、僅か十一歳の子供があり得た如く、態と聽かぬ風をし、強情だつた。

然し私は今や何をする事が出来たか。萬事があから様に成り、萬事摘發された、私が非常に注意して、守護し、隠して居た萬事が……永遠の不名譽と、恥辱とが私にお、ひ掛つた！然し、私が、何故私が恐がつたか、何を私は隠し度く思つて居たかといふ事が出来なかつたのは事實だが、私は或る何物かを恐れ、その或る物が見付けられたといふ事を考へると、木の葉の如くにふるへた。ついその時迄、私は、それが何か分らなかつた、それは善いものか悪いものか、立派なものか、羞かしいものか、稱讃す可きものか、非難す可きものか。今や私に押し付けられた私の困苦、私の難澁の中で、私はそれが馬鹿々々しくつて、羞かしきものなる事を知つた。同時に、本能的に、私は、この裁決は嘘で、非人間的で、粗雑だと感じたが、私は氣を挫かれ、參り、意識は私の内で阻碍され、混亂に陥つて居る

やうに思はれ、私はその裁決に抗して起つ事も、それを適當に批評する事も出来なかつた。私は何が何やら分らなく成り、私は只、私の心が残酷に、破廉恥に傷つけられ、甲斐無き涙で溢れるのを感じた。私は腹を立てたが、私は、私がこれ迄に會て感じた事無き憤怒と憎悪とで心が煮え繰り返つて居た、何故なら、それは私の生涯で、私が本當の悲哀、悔蔑、害を知つた最初だつたから——そして、それは、少しも誇張無く、眞實にさうだつた。最初の、未經験の、漠然とした感情が、子供の私に、非常に荒つぽく取り扱はれた。最初の香はしく、處女的の謙遜が、非常に速かに曝され、辱かしめられ、最初のそして、多分、非常に眞實で、審美的な印象が、酷く踏みにじられた。勿論、私の苦惱の中には、私の迫害者が知らず、憶測しなかつたものが澤山あつた。私がそれ迄、解剖する事が出来なかつたが、いは、私が恐れて居た或る事柄が幾分それに加はつた。私は私の顔を、私の枕に隠し、絶望し、苦んで、私の寢床に横はり続け、私は熱が出たり、寒氣がしたりした。私は二つの疑問に悩まされた。第一に、彼の憎む可き美しき人はその朝、柴林の中で、エム夫人と私との間に何を見たか、そして、事實、彼女は何を見る事が出来たか。そして、第二に、今や如何にして、私は、その場で、羞かしさと絶望との爲めに、死ぬ事なしに、エム夫人の顔を見る事が出来たか。

遂に庭の異常な物音が私が落ち入つて居た半意識の状態から、私を呼び起した。私は起きて、窓へ行つた。庭の全部が馬車や、乗馬や、騒いで居る召使で詰つて居た。彼等は皆出立しやうと居るやうに思はれた、紳士の中には、既に、彼等の馬に乗つたものもあれば、馬車の中に座らうとして居るも

のもあつた……そこで、私は、村祭りへの遠足を思ひ出し、段々、或る不安が私に襲ひ掛つた、私は心配に成つて、庭に、私の小形の馬を探し出したが、そこには小形の馬は居なかつたので、彼等は私を忘れたに違ひ無かつた。私は我慢が出来なくなつて、最早、不愉快な出會や、私の最近の汚辱……の事を考へず、向ふ見ずに下へ驅け下りた。

恐ろしい報せが私を待つて居た。私の割愛する馬も無く、どの馬車にも席が無かつた。萬事が取り極められ、あらゆる席は塞がつて居たので、私は他の人々に譲らなければならなかつた。この新しい打撃に心を挫かれ、私は階段に立ち、私の爲めに至極小さな隅つ子も残つて居ない、四輪大馬車、四輪馬車、回遊馬車の長い列、及び、その馬が落ち着かずに、威勢よく跳ねて居る、派手やかな着物を着て居る婦人を悲しげに眺めた。

一人の紳士が遅れた。皆なは只、出發する爲めに彼の到着を待つて居たのだ。彼の馬は戸のところ立ち、はみを噛み、彼の蹄で地をあがき、しよつ中跳び上り、立ち上つて居た。二人の馬丁が注意深く、その馬勒を持ち、外のものは皆恐がつて、引き下つて立つて居た。

非常にいま／＼しい事が起つて居て、それが私の行く事を妨げた。新しい訪問者が到着して、あらゆる席を塞いださいふ事に搦て、加へて、二疋の馬が病氣に成り、その中の一疋は私の小形の馬だつた。然し困つたのは私だけで無く、私達の新しい訪問者、私が既に語つた顔の青白い青年にも馬が無い様子だつた。この困難に打ち克つ爲めに私達の主人は、彼の良心を満足さす爲めに、それに乘る事

は不可能で、購買者さへ見付かれば、この獸物を、彼等が前から、その性質がいけないから賣らうと思つて居たと附言して、彼の癖の強い、馴れて居ない種馬を提供するといふ極端な手段を用ひないわけには行かなくなつた。

然し彼の注意に拘はらず、彼の訪問者は、彼が巧みな馬乗りで、兎に角、行かないよりは、どんなものにも乗つて行つた方がいゝと明言した。私達の主人はそれ以上何もいはなかつたが、今や私は狡猾な、曖昧な微笑みが彼の唇に漂つて居ると思つた。彼は自分の馬術を自慢した紳士を待ち、自分の馬にも乗らず、もどかしさうに手を擦り、しよつ中戸の方を見い／＼して立つて居た。同じやうな感情を、全連中の前で、何の理由も無しに、何時人を殺すかも知れない馬を預けて居るといふ誇りで殆んど息を切らせさうにして、その種馬を抑へて居た。二人の馬丁も分有して居るやうに思へた。彼等の主人の狡猾な微笑に似たものが、期待の爲めにまん圓く、彼の大膽な訪問者が現はれる筈の戸の上に据えられた彼等の眼にも輝いた。馬も亦、宛かも、彼が主人や馬丁と結托して居るかの如く振舞つた。彼は宛かも、彼が一打程の好奇の眼に依つて見守られつゝあり、或る濟度し難い悪者が彼の犯罪上の功績を誇りとする事もあるだらうのと同じく、彼の悪い評判を誇りとして居る事を、彼が感じて居るかの如く、傲慢と、高慢に身を處した。彼は彼の獨立を敢て抑制せむとする大膽な男を侮蔑して居るやうに思へた。

遂に彼の大膽な男が現はれた。皆なを待たせた事を濟まなく思ひ、急いで手袋をぬぎ、彼は何にも

見ずに進み出、階段を走り下り、待つて居る馬の鬣を掴む爲めに、彼の手を伸した時に、眼を擧げただけだつた。然し彼は直ぐに、馬が狂暴的に立ち上つたのと、びつくりした見物人の注意を呼ぶ絶叫の爲めに度を失つた。その青年は後じさりし、體中が震へ、怒つて鼻嵐を吹き、彼の血走つた眼を瘁惡にぎよ／＼させ、宛かも、彼が空中に駈け出し、二人の馬丁も一緒に連れて行かうと思つて居るかの如く、しよつ中後ろ脚で立ち上り、前足を上げて居るこの癖のある馬を當惑して見た。一瞬間、この青年はすつかり閉口して居たが、當惑して、少し赤く成り、彼は彼の眼を擧げて、びつくりして居る婦人連を見た。

「非常に立派な馬だ！」と、彼は獨語のやうにいつた「そして、彼に乗る事は大變愉快に違ひないと私は思ふのですが……」と彼は、彼の優しい、利口さうな顔に非常に相應しい、公明な、人の善い微笑を以て、私達の主人の方に向つて結語した。

「だが、確かにあなたは、優れた馬乗りだと私は思ひます」と、寄り付き難き馬の持主は喜ばしさうに答へ、彼は若者の手を、親切に、それ許りでなく、愉快氣に握り締めた。「最初から、あなたには、どんな獸物を取り扱はねばならぬか、分つたのですもの」と、彼は威嚴を以て附言した。「私は騎騎兵に二十三年間務めて居ましたが、彼の獸物の御蔭で、地べたに落つことされた事は三度切りないので、その三度といふのは、この役に立たず動物に乗る度に起つた事なのですよ、本當ですよ、おいタンクレッド、御前に乗れる人は此處には居ない！御前の乗り手は、イリヤ、ムロメツツのやうな人

でなくちやならないらしい、そして彼は今頃は、御前の齒が落ちるのを待つて、カバトチャロヴォの村に、靜かに座つて居るに違ひない。さあ、向ふへ連れて行け、此奴は充分に皆なを驚かせた。此奴を引つ張り出したのは暇潰しだつた」と、彼は彼の手を喜ばし氣にさすつて叫んだ。

タンクレッドは彼の主人の爲めに何の役にも立たず、徒らに穀物を食べて居るだけだつたといふ事をいはねばならぬ、その上、この年取つた驕騎兵は、彼が、彼の美しさの爲めだけに求めた、このつまらぬ獸物に途方も無い金を拂つた爲めに、馬に關する知識に對する彼の評判を失つた……而かも彼は今や、タンクレッドが彼の評判を維持し、外の乗り手を片付け、新しい、馬鹿けた名譽を得た事を喜んだ。

「で、あなたいらつしやらないの。」と、彼女の……が、この時、附添つて呉れる事を特に切望したブルンドの美人は叫んだ。「まさか、あなたおつかなく成つたのではないでせう。」

「確かに參りますよ」と、彼の青年は答へた。

「本當なの。」

「ぢや、あなたは、私が頸の關節を外して死ねばい、と思つていらつしやるの。」

「ぢや、直ぐに私の馬に御乗りなさいな、恐くありませんよ、本當に温和しいのですの。皆なに手間取らせ度くありません、皆なは直ぐに鞍を變へる事が出來ますよ！あなたのを取つて見ませう。確かにタンクレッドだつて、しよつ中、そんなに馴し難いといふ譯はありませんよ。」

さいふより早く、彼の向ふ見ずは、鞍から飛び下り、彼女が最後の文句をいつた時には、私達の前に立つて居た。

「彼が、あなたの下らない婦人鞍をつけさせて黙つて居ると御考へなら、あなたにはタンクレッドが分らないのだ！それに、あなたに頸の關節を外させ度くない、そんな事があつては残念だ！」と、私達の主人は、心では悦び、いつもの如く、彼が大の御人好や年取つた兵士に相應しいと考へ、彼が婦人に特に魅力ありと想像した、故意と粗暴な、下品な語を裝ひ使つていつた。これは私達が熟知して居る、彼が好きな幻想の一つ、彼の好きな奇癖だつた。

「ね、泣き虫さん、一つやつて見てはどうだ。ひどく行き度がつて居たぢやないか。」と彼の勇ましい女馬乗りは、私がひどく不謹慎で、彼女の眼に留つたので、私に氣が付き、責めるが如く、タンクレッドを指さしていひ、彼女は全然徒らに、彼女の馬から下りたのではなくするやうに、辛辣な事をいはずに私を赦さうとはしなかつた。

「あなたは弱蟲ぢやないでせう。私達は皆なあなたが英雄で、恐れる事を羞かしく思つて居る事を知りますよ、殊にあなたが見られて居る時には、この上等の御小姓さんは」と、彼女は、馬車が人口の一等近くにあつたエム夫人をちらと見て附言した。

この美しい女丈夫がタンクレッドに乗らうと思つて私達に近いた時には、烈しい憎しみと復讐とが私の心を浸した……然し、私は、私が、この向ふ見ずの思ひも寄らぬ挑戦に對して感じたものを描く

事は出来ない。私が、彼女のエム夫人に對する瞥見を見たら、何も見えなくなった。一瞬間、或る考へが不圖私の胸に浮んだ。……然しそれは、火薬の閃光の如く、一瞬間、一瞬間よりも短かつた、多分それは最後の頼みだつたので、今や、突然、私は、元氣が付くにつれて、むかつ腹が立つたので、私は私がどんな人間かを示して、あらゆる敵をすつかりうたへさせ、彼等を皆、皆なの前で復讐して遣り度く切望した。それとも、何か或る奇蹟、私がその時迄少しも知らなかつた中古史からの喚起の爲めに私の浮はつた頭中に馬上仕合、武者修行の騎士、勇士、可愛いらしい貴婦人の像、太刀の音、群衆の叫びや喝采、さういふ叫びに交つて、自負心ある人を勝利や名聲よりも快く動かすびつくりした人の臆病氣な叫びが旋轉したのか——すべてかういふロマンチックな詰らない事がその時私の頭にあつたのか、それとも、もつとありさうな事で、將來の私の爲めに貯えてあつた避く可からざる馬鹿けた事の最初の曙に過ぎなかつたのか分らないが。兎まれ、私は時節が到来したと感じた。私の心は飛び、震へた、そして、どうして、一跳で、階段を下り、タンクレッドの側に立つたか覺えがな

い。「私が怖がつて居ると思つて居るの。」と、私は勢よく、傲然と、興奮で息も切れ、涙で私の頬が湯傷する迄激して赤く成り、殆んど目も見えなく成つた程熱狂して叫んだ。「宜しい、見てると分らあ！」そして、タンクレッドの鬘に掴み掛り、皆なが私を押し止める運動をする間なしに、私は私の足を鞍に置いた、然し、その瞬間に、タンクレッドは後足で立ち、急に首をねぢ、前へ威勢好く跳んで、身

動きも成らぬ様にびつくりした馬丁の手から離れ、疾風の如く進み去り、誰も彼も戦慄して叫んだ。

どうして、手綱を放さなかつたかも想像出来ない。タンクレッドは四つ目垣の門の向ふへ私を運び、鋭く右へ曲り、道に拘泥せず、垣に沿つて飛ぶ様に走つた。その時初めて、私は私の後ろに、五十人の聲の叫びを聞き、その叫びは、私の氣絶し掛つて居る心に、私が決して、私の幼年時代の彼の狂的な瞬間を忘る、事無かる可き程の誇りと愉快の感じを伴つて反響した。あらゆる血が私を混亂させ、私の恐怖を壓倒して、私の頭に突進した。私は逆上した。私が今覺えて居る如く、その功績には、確かに、少し修行武者的のところがあつた。

とはいへ、私の武士的の手柄は一瞬間ですつかり終つた。然らずんば、武士らしきミ調和が取れなく成つたらう、又事實、どうして、私は遁れたか分らない。私は乗り方を知らなかつた、私は教へられては居た。然し、私の小馬は乗馬といふよりも寧ろ羊だつた。若し彼に私を投げ落す機會があつたらきつミ私はタンクレッドから投げ落されて居たに違ひなかつたが、五十歩駈けつてから、彼は突然道に横はつた大きい石に驚いて、突然駈け戻つた。彼は全速力で走つて、急に曲つたので、鞍からはね飛ばされ、二十呎も鞠のやうに飛ばされず、私が粉微塵に碎かれず、タンクレッドが、かくも突然の回轉の爲めに彼の足の關節を外さなかつた事は私には今でも一つの謎である。彼は怒つて、彼の頭を振り上げ、激怒で酔つたかの如く、彼方此方へ跳び、彼の脚を無闇に伸し、虎が彼に跳び掛り、その齒と、爪とを彼の脊中に突つ込まうとして居るかの如く、彼の脊中から私を振り落さうと努めて、門

迄突進して歸つた。

その次の瞬間に、私はけし飛んで居たところだつた、私は落ち掛つて居た、然し、多くの紳士が私を助けに飛んで來た。彼等の中の二人は、森林の無い原への道を遮断し、他の二人は驅け來り、彼等の馬の横腹が、私の脚をすんでの事に押し潰した程タンクレッドを圍み、彼等の中の兩者とも彼の馬勒を握へた。二三秒後に、私達は階段へ戻つた。

彼等は顔青ざめ、やつとこさで息をして居る私を馬から下した、私は風に吹かる、草の葉の如くに震へて居り、立つて居るタンクレッドもそれは同じ事で、彼の蹄はいはゞ地中に突き込まれ、彼の體全體は投げ返され、赤い、血が流れて居る鼻の孔から、彼の火の如き息を吹き、體中がひきつり、震へ、傷つけられた誇りと、子供が平然として大膽な事に對する怒りとに壓倒されて居るやうに思へた。私の周圍全體に、私は、狼狽と、驚きと、恐慌の叫びを聞いた。

その時、私のさまよへる眼が、青ざめ、激動して居る様子をして居るエム夫人の眼に留つた。そして——私は決してその瞬間を忘れる事が出來ない——一瞬間に、私の顔は血色が好く成り、眞赤に成り、火のやうに燃えた。私はどうしたのか分らないが、自分自身の感情の爲めにまごつき、驚いて私は、おどくとして、下を向いた。然し、私の瞥見は氣付かれ、それは見付けられ、それは私から盗み取られた。あらゆる眼はエム夫人に向ひ、自分が突然、注意の中心なる事に氣付いて、彼女も亦何か無邪氣な、われ知らずの感情の爲めに子供のやうに赤く成り、笑つて自分の狼狽を隠さうとした

が、駄目だつた……

勿論、これは皆、外部からは非常に可笑しく見えたが、その瞬間に、この上なく無邪氣で、思ひ掛けぬ出來事が私が皆ながら嘲笑されないうやうにし、この變事全體に特別な色を添へた。この突飛な惡戯全體の煽動者で、その時迄、私の不倶戴天の仇敵だつた彼の可愛いらしい、いぢめ手が突然、突進して來て、私を抱擁し、接吻した。彼女は、彼女が、私が、彼女の果し狀を敢て受取り、彼女が、エム夫人をちらりと見て、私にぶつ、けた籠手かごてを拾つた時、殆んど自分の眼を信じる事が出來なかつた。彼女は私がタンクレッドに乗つて、飛び去つた時には、恐ろしさ、自責との爲めに死んだやうだつた。今や、それがすつかり終へ、殊に、彼女が、エム夫人に對する瞥見、私の狼狽、私の突然の赤面を見付け、彼女のたわいない、小さい頭の、ロマンチックな素質が、その瞬間に、新しい秘密、を與へた時——彼女は私の「騎士らしさ」に非常に熱中し彼女は飛んで來て、私を抱き締めた。彼女は二滴の小さい、澄んだ涙がふるへ、輝いて居た。最とも無邪氣で、嚴しさうな、小さい顔を擧げ、彼女のまわりに集つた群衆を見た。

彼女は皆なが、彼女の快活な熱中を歎賞し、宛かも魂を奪はれたやうに立つて居るのに氣が付かなかつた。彼女の迅速で、思ひ掛けぬ動作、彼女の誠實な、小さい顔、彼女の質朴な單純さ、彼女のいつも變らぬ微笑み勝ちの眼に湧いた涙の爲めに現はれた思ひ掛けない感情は、非常に意外な事だつたので、誰も彼も、宛かも、彼女の表情、彼女の迅速で、火のやうな語や、身振りに依つて電氣を掛け

られたかの如くに、彼女の前に立つた。宛かも、誰も、彼女の熱誠が溢れる顔の稀な瞬間を外す事を恐れて、彼の眼を彼女から離す事が出来ないかのやうだつた。私達の主人さへ、麝金香のやうに眞紅色に成り、人々は、彼が「恥しい事だが」暫らくの間、彼の愛す可き御客に戀したと後で彼が告白するのを彼等は聞いた。明言した。で、勿論、この後、私は武士に成り、英雄に成つた。

喝采の音が起つた。

「青年萬歳！」と、主人が附け足した。

「だが、彼は私達と一緒に行くのでせう、確かに彼は私達と一緒に行かなくつちやいけませんよ」と彼の美しき人はいつた。「彼に席をめつけませう、彼に席をめつけてやらなければなりません。彼を私の側に座らせませう、私の膝の上に……いえ、いえ！それは間違ひです……」と彼女は、私達の最初の遭遇を面白がつて笑ふ事を禁じる事能はず、笑ひ乍ら、訂正した。然し彼女は笑ひ乍ら、私が氣を悪くしないやうに、出来るだけ私を和らげるやうにして、彼女は柔かに私の手を撫でた。

「さうとも、さうとも」と幾つもの聲が相槌を打つた。「彼は行かなくつちやあ、彼は彼の席を得たよ。」その事は瞬く間に定つた。私と彼のブロンドの美人とを知り合ひにした彼の縁遠い女がすぐに、あらゆる若い人達からの、家に居て、私に彼女の席をやれといふ懇願で攻圍された。彼女は酷く無念だつたが、微笑み、こつそり怒りの叱聲を漏して、承諾する事を強ひられた。彼女の不斷の隠れ家だつた彼女の保護者、私の以前の敵で、新しき友達は、彼女の瘡の強い馬に乗つて馳け去り乍ら、子供の

やうに笑つて、彼女は彼女がうらやましく、自分も家に居る事が出来たら嬉しいだらう、何故なら、今に雨が降りさうで、私達は皆びしょ濡れに成るだらうからと彼女に呼ば、つた。

そして、彼女が雨を豫言したのは正しかつた。本當のどしや降りが一時間経たない内にやつて来て旅行はめちやくにされた。私達は數時間、村の小屋に兩宿りし、雨に續いたしめつばい霧の中を、晩の九時と十時の間に、歸宅しなければならなかつた。私は少し熱が出だした。私が出發しやうとして居たその時に、エム夫人が私のところへやつて来て、私の頸のところをむき出して、私が私の短衣の上に何も着てない事を驚いた。私は私の上衣を取つて来る間が無かつたと私は答へた。彼はピンを取り出し、私の襯衣の折つたカラーを留め、自分自身の頸のところから、眞紅色の紗の頸布を取り私が咽喉加答兒に成らないやうに、それを私の頸に巻きつけた。彼女はこれを非常に急いでやつたので、私は彼女に御禮をいふ間も無かつた。

然し私達が家に着いた時、彼女は小さい客間に、ブロンドの美人及びその日タンクレッドに乗る事を拒絶して馬術に關する高名を得た顔色の青い青年と一緒に居た。私は彼女に御禮をいひ、襟巻を返しに行つた。然し今や、私のあらゆる出来事の後、私は少し羞かしく成つた。そこで緩くり反省し沈思する爲めに急いで二階へ行き度かつた。私はいろくな印象が溢る、許りだつた。私は頸布を返し乍ら、私はいつものやうに耳迄赤く成つた。

「きつと彼はその頸布が取つて置き度いのですよ」と、その青年が笑つていつた。「彼があなたの襟巻

と別れとしない事は誰にも分りますよ。」

「さうだ、さうだ！」と彼の美しき婦人が口を入れた。「あ、！何といふ子供だらう！」と彼女は明かにいま／＼し氣に頭を振つていつたが、彼女は冗談が過ぎる事を欲しなかつたエム夫人からの眞面目な瞥見の爲めに素速く止めた。

私は急いで去つた。

「ね、あなたは子供だよ」と彼の向ふ見ずは次の部屋で、私に追ひ付き、懇ろに私の兩手を取つていつた。「ね、そんなに欲しければ、襟巻を返しさへしなければ宜かつたのだよ。何處かへ置いて来たといへば宜かつたのだよ、さうすりや、それで御終ひだつたのだよ。何て馬鹿な人でせう！そんな事も出来ないなんて！何て可笑しな子だらう！」

さういつて彼女は私が芥子のやうに赤く成つたのを笑つて私の頬を指で軽く叩いた。

「ね、私はもうあなたの御友達だらう？喧嘩はもう御終ひね？どう？」

私は笑つて何もいはずに彼女の指を握り締めた。

「まあ、どうしてそんなに……どうしてそんなに顔色が悪くつて震へて居るの。寒いのだ。」

「え、何だか氣持ちが悪いのだ。」

「まあ可哀相に！興奮し過ぎた故よ。分つて？夕飯迄起きてないで寝るとい、さうすると朝にはすつかり快く成つて居るだらう。此方へいらつしやい。」

彼女は私を二階へ連れて行つたが、彼女は切りなしに看護を私の爲めに濫費した。私に着物を脱がせて置いて彼女は下へ馳け下り、私のところへ御茶を持つて来て、私が寝て居たら、それを自分で持つて来た。彼女は温かいさしこの蒲團も持つて来た。私は私に濫費されたあらゆる世話や注意ひどく身に沁み、感動した。若くは多分私はその日一日、旅行、及び發熱の爲めに心を動かされたのだ。私は彼女に御休みなさいといつた時に、私は彼女を熱心に、彼女は私の最とも親密な友達であるかの如く抱き緊めた。そして疲れて居た私に、その日のあらゆる感情がどつと許りに戻つた。私は彼女の胸に抱き付き乍ら、涙を流さむ許りだつた。彼女は私が興奮し過ぎて居るのに氣が附いたが、わが向ふ見ずの人も些さか感動して居たに違ひない。

「あなたは非常に善い子だ」と彼女は優しい眼で私を見ていつた「私を怒つちや嫌よ。怒つちや居ないでせう。」

實際、私達は最とも親密で、忠實な友達に成つた。

私が目を覺ましたのは早い方だつたが、太陽は既に部屋中に輝かしい光を漲らして居た。私は昨日熱なんか無かつたやうにすつかり健康で、丈夫に成つて寢床から飛び出した。實際、私は今やいふにいはれず嬉しかつた。私は前日を思ひ出して、昨夜したやうに、その時私の新しい友達、髪的美しい人をもう一度抱擁する事が出来たならば、どんな幸福でも呉れてやると思つた。然し非常に早くつて未だ皆なが寝て居た。急いで着物を着て庭へ、それから柴林へ出た。私は木の葉がひどく繁つて居る

ところや、木の香が一層樹脂質なところや、太陽が葉の生ひ茂つた黒闇を貫ぬく事が出来るのを喜んで非常に樂し氣に現はれたところを進んだ。實に好い朝だつた。

すん／＼進んで知らぬ間に、柴林のすつと向ふの端に着き、モスクヴァ川に出た。それは小山の麓二百歩下を流れて居た。河の向ふの岸では人々が草を刈つて居た。私は並んで居る全體の鋭利な草刈鎌が刈り手が動く度びに、一緒に日光に輝やき、それから又匿れる、小さい、輝やかなしい蛇の如くに光を失ふのを見て居た。私はどんなに長い間冥想して暮したか分らない。遂ひに私は、大道から園主の邸宅に續いた路、私から二十歩のところ、馬が鼻嵐を吹き、いら／＼して地を爬くので幻想から喚起された。乗り手が此方へやつて来てそこに止まるや否や、私がこの馬を聞き付けたか、それとも、物音が暫らくわが耳に入り乍ら、私を私の夢想から喚起さなかつたかは私には分らない。好奇心に動かされて私は柴林に入つたが、行く事數歩ならずして、低い調子だが口早に話して居る聲を聞き取つた。私は路を縁取る灌木の幹を注意して近づき登つたが、忽ち驚いて飛び返つた。私は見慣れた白い着物をちらりと見、優しい女の聲が私の心に音楽の様に響き渡つた。それはエム夫人だつた。彼女は鞍から屈み、急いで彼女に話して居る馬上の男の側に立つて居たが、彼がネヌ、昨朝立ち去りその出發の事でエム氏が非常に忙しがつて居た彼の青年なる事を認めて私は仰天した。然しその時人々が彼は遠く南露西亞のあるところへ立ち去るのだといつて居たのでかくも早く彼が再び私達のところに来り、而かもエム夫人と只二人で居るのを見て私は非常に驚いた。

彼女はこれ迄に私が見た事が無い程感動し、擾亂して居り、涙が頬にきらめいて居た。青年は彼女の手を取り、それを接吻する爲めに屈んで居た。私は分れの時の彼等に偶然出會したのだつた。彼等は急いで居る様子だつた。遂に彼は彼のかくしから封をした封筒を取り出し、それをエム夫人に與へ片腕で彼女を抱き、依然として馬から下りずに、彼女に長い、熱烈な接吻を與へた。すぐに彼は馬に鞭打ち、矢の如くに私を通り過ぎて飛び去つた。エム夫人は暫らく彼を見送つたが、やがて思ひに沈み、怏々として家路に就いた。然し路を二三歩歩いてから、彼女は突然氣が付いた様子で、急いで灌木を去り、柴林を通つて進んだ。

私は見たところのもの、爲めに驚ろき、混亂して彼女の後に連いて行つた。私の胸は恐怖の爲めであるかの如くに烈しく鼓動した。私はいはゞ痺れ、霧で包まれた。私の考へは散り／＼に成り、めちやくちやに成つた。然し、は何故か知ら、非常に悲しかつた事を覚えて居る。緑の葉を通して、しよつ中私は眼の前に彼女の白い服装を瞥見した、私は彼女が私に氣が付くかも知れないと思ふとふるへたけれども、彼女を見失はずに知らず／＼彼女に連いて行へた。遂に彼女は家に至る路に出た。少し待つて私も灌木から出た。然し、道の赤い砂の上に、眼に留るとすぐに十分前にエム夫人に渡されたのだといふ事が分つた封をした小包が道の赤砂の上に落ちて居るのを見た時、私の驚きは如何許りだつたか。

私はそれを拾つた。兩側ともその紙には何も書いてなく、名宛も無かつた。封筒は大きくは無かつ

だが、三枚かもつとそれ以上の書翰紙が入つて居る様子で、くらくらして居り重かつた。

その封筒の趣意は何であつたか。確かにそれは全秘密を説明した。多分その中には、エヌが殆んど彼等の短かい、忙しい會見でいふ事が望めなかつた事が皆いつてあつたらう。彼は馬から下りさへしなかつた。……彼が急いで居たのか、それとも、別れ難く成るのを恐れて居たのか——それは分らない……

私は路へ出ずに立ち止まり、封筒はその最と目に立つところにて投げ、エム夫人が遺失に気が付きそれを探しに戻つて来るだらうと思つて、それを見張つて居た。然し四分間待つてから、私は最早辛抱する事が出来ず、私が見出したものを又拾ひ、それをかくしに入れ、エム夫人を追つ驅けた。私は彼女に庭の並樹路で會はした。彼女は思ひに沈み、下を向いて居たけれども、早い、忙しい足取りで眞すぐに家の方へ歩いて居た。私はさうして、か分らなかつた。彼女のミころへ行つて、渡したらい、か。それは私は萬事を知つて居る、私は始終を見て居たといふのと同じに思へた。一言いへば曝露した。らう。どういふ風に彼女を見れば好かつたか。どういふ風にして彼女は見たらうか。私は依然として彼女が遺失を發見して、通つた道に歸る事を期待した。さうしたら私は氣付かれずに封筒を路に投げる事が出来、彼女はそれを見付けたらう。さういふ譯には行かなかつた！私達は家に近いて居た、彼女は既に氣が付いて居た……

生憎、皆なが、昨夜の不成功に終つた遠征の後で、彼等は私は少しも聞いてなかつたが、何か新し

い事を取り極めて置いたので、その日は非常に早く起きて居た。皆なが出發する用意をして居り、ヴィランダで朝飯を食べて居た。私はエム夫人と一緒にその見られないやうに十分間待ち、庭をまわり彼女から暫らく遅れて他の側から家へ近いた。彼女は腕を組み、蒼ざめ、擾亂して、ヴィランダを彼方此方歩いて居り、彼女の眼、彼女の歩き方、彼女のあらゆる動作に明かに認める事が出来て居ても立つても居られぬ、絶望的な不幸を抑へる事に明かに力をこめて居た。時々彼女はヴィランダの階段を下り、花壇の間を庭の方へ二三歩歩いた。彼女の眼はあせり、熱切に、更らに躁急に路の砂の上やヴィランダの床の上に何ものかを探して居た。彼女が遺失に気が付き、どこかこゝいら、家の近くに手紙を落したと想像して居る事は疑ひ無かつた——さうだ、さうに違ひ無い、彼女はさう信じたのだ。

誰か、彼女が蒼い顔して居り、擾亂して居る事に気が付き、外の人々もさういつた。彼女は彼女の健康に就いての質問に取り圍まれた。彼女は笑ひ、戯談をいひ、快活な様子をしなければならなかつた。しよつ中彼女は、二人の婦人に話して、壇に立つて居た夫を見て居たが、彼女は可哀想にも、彼が初めて着いた日のやうに、身震ひし、當惑に捕はれた。私は手をかくしに突き込み、その中で手紙をしかと握り、エム夫人が私に氣が付く事を運命に祈り、彼等皆ながら少し離れたところに立つて居た。私は彼女を元氣付け、瞥見だけで、もい、から、彼女の心配を慰さめ度く切望した。内所で彼女に一語いふ事をだ。然し彼女が偶然私を見ると、私は眼を落した。

私は彼女の苦しみを見たが、私は誤つては居なかつたのだ。今日迄私は彼女の秘密を知らなかつた

のだ。私は私が見た事か、私が今書いた事以外は何も知らない。彼の戀愛は多分、一寸見て想像出来るやうなものではなかつたらう。多分彼の接吻は告別の接吻であり、多分それは彼女の平和と名譽にされた犠牲に對する最後の小さき報酬だつたらう。エヌは立ち去り、彼は多分永遠に彼女に別れるのだつた。私が手に持つて居たあの手紙でも——何が書いてあつたか誰に分らう！どうして裁判する事が出来やう。誰が非難する事が出来やう。而かも彼女の秘密が突然現はれる事は恐ろしい事であり——彼女に致命的な打撃であつたらうといふ事は疑ひない。私は今もその時の彼女の顔を覚えて居るが、それは此上無き苦しみを現はして居た。死刑執行でもあるかの如くに、十五分間内には、多分一分間内には、萬事発見されるかも知れず、手紙が誰かに見付けられ、拾はれ、それには名宛が無いので、開かれるかも知れず、それから……と感じ、知り、信じ、豫期する事よ。次にはどんな事が起るか。どんな苦惱だつて彼女を待つて居たものより酷くはない。彼女は彼女の裁判官に成る人々の間を動き廻つた。今に彼等の微笑み、諂ひるやうな顔は威嚇的に、残忍に成るだらう。彼女はそれ等の顔に嘲弄、惡意、氷の如き輕蔑を覺り、然る後彼女の生涯は明るる事なき永遠の闇黒に沈むだらう……さうだ、その時には今分つて居るやうには分つて居なかつた。私は只ぼんやりした疑念と懸念と、充分には分らなかつたが、彼女の危険を考へると心痛を感じるだけだつた。然し彼女の秘密に何が隠れて居やうとも、贖罪が要つても私が目撃者であり、決して忘れまじきかの苦惱の瞬間に依つて大いに贖罪されて居た。

然しその時元氣好き出發の呼び出しが來た、直ぐに皆なが樂しげに驅け廻り出した。笑ひ聲や快活なおしやべりが至るところに聞えた。二分と経たない内に椽側には人影が絶えた。エム夫人は遂に氣分が勝れないといふ事を自認して、連中に加はる事を斷わつた。然しあり難い事には、外のものは皆出發し、誰も彼も急いで居たので、同情や、質問や、忠告で彼女を困らす暇が無かつた。二三人家に残つた。彼女の夫は二言三言彼女にいつた、彼女はぢきに快く成るだらう。彼は心配するには及ばぬ寢る必要はない、庭へ一人で行かう……いや私と一緒……かういつて彼女は私をちらと見て答へた。こんなに都合の好い事は無かつた！私は愉快と、歡喜で赤く成つた。一分後には私達は出掛け居た。

彼女は彼女が來た道を本能的に思ひ出し、眼を地に据えて、眼の前を熟々眺め、多分私が彼女の側を歩いて居るといふ事も忘れて、私のいふ事にも答へず、一心に見廻して、彼女が柴林から歸つた並木路や小徑を歩つた。

然し私が手紙を拾ひ、小徑がつかたところへ來てしまつたら、エム夫人は突然立ち止まり、不幸で微弱な聲で、氣分が悪いから、家へ歸るといつた。然し彼女は庭の垣根に着くと又立ち去つて暫らく考へた、絶望の微笑が彼女の唇に浮び、すつかりまゐり、疲れ果て諦らめ、最惡の結果を豫期し、彼女は、彼女の意思を私に話すことも忘れ、一言もいはずに曲り、後戻りした。

私の心は同情で裂かれる思ひで、どうして、か分らなかつた。

私達はいつた、否私は彼女を私が一時間前に馬の足音や、彼等の會話を聞いたところへ連れて行つた。こゝには、鬱蒼たる楡樹の側に、廻りに葛や、賣子木や、野薔薇が生え、一つの大きい石から切り刻まれた休み場があつた、森全體には小さい橋や、四阿や、岩屋や、さういふやうな不思議なものが點在した。エム夫人は腰掛に腰を下して、私達の前に開けて居た驚く可き景色を無意識に眺めて居た。少しすると彼女は本を開いたが、讀みもしず、頁を繰りもせず、殆んど何をして居るか無意識でそれをじつと見て居た、九時半頃だつた。太陽は既に高く、自分の光りに溶け去るかの如く、濃紺の空に赫々として浮んで居た。刈り手は最早すつと向ふに行つて居た、彼等は私達の居る河岸からは殆んど見えなかつた、刈られた草の果てし無きみねが連綿と續いて彼等の後を這ひ、しよつ中微かに動くそよ風がその香を私達に吹き送つた。「蒔かず、刈り入れもせず」そのふざけたがる翼で切り裂く空気の如く自由なるものどもの止む事無き合唱だけが私達の廻りにあつた。その時あらゆる花、あらゆる草の葉は供物の芳香を發し、その創造主に「父よ、われは恵まれ、幸ひなり」といつて居るやうに思へた。

私はあらゆるこの歡喜に満ちたる生命の間に只一人、死んだもの、やうだつた彼の憐れな女を見た。二滴の大きな涙が、せつない悲哀に依つて彼女の心から絞り取られ、彼女の睫毛にじつとぶら下つた。この憐れな、がっかりして居る人を救ひ、慰さめる事は私に出來たが、如何にしてかの題目に近づき、如何にして第一歩を取る可きか分らなかつた。私は實に苦んだ。百度も私は彼女のミこころへ行きかゝ

つたが、その度に私の顔は火のやうに赤く成つた。

突然或る巧い考へが私に了得された。私はそれをする仕方を見付けた、私は蘇生した。

「花束を摘んで上げませうか。」と私が非常に嬉しうな聲でいつたので、エム夫人はすぐに頭を擧げて、私をじつと見た。

「え、」と彼女は遂に微かに微笑み、すぐに又眼を本に落して、弱々しい聲でいつた。

「摘んかどないと、ぢきにこゝの草も刈りに來るから、花がなく成るでせう」と私は一心に仕事に掛つて叫んだ。

私は間もなく花束、家へ持つて行くのは羞かしい下らない、詰らないのを摘んだ、然し花を摘み、それをゆはえて、私の心はどんなに軽かつたか！野薔薇と賣子木とは私は休み場のそばで摘み、そこから遠くないところに未だ熟してない裸麥の野があるのを知つて居た。私はそこへ矢車菊を取りに走つた、私はそれに、此上なく見事な、此上無く金色なのを選んで裸麥の丈高き穂をまじへた。すぐ側で、私は忘れな草が一杯群つて居るのに出くわして、私の花束は殆んど完全に成つた。すつと向ふの草地には、濃紺の風鈴草や野石竹があり、私は睡蓮ひつじくを取る爲めに河のふち迄走り下りた。遂に、引つ返し、花束の周圍に附ける爲めに楓の明るい緑の、扇子形をした葉を取りに一寸の間森へ入り、私は偶然一科の三色菫に出會はしたが、仕合せにも、そのそばに、すみれのかぐはしき匂ひが、茂つた、新鮮にして汁多き草に隠れ、未だ露滴できらくして居る小さい花を偶然露はした。花束は完全だつ

た。私はそれを繩のやうにねぢれて居た。事な長い草でく、り、花で隠して、然し、一寸でも私の花束に注意すれば、たやすく氣が付くやうに、注意して手紙を真中に置いた。

私はそれをエム夫人のところへ持つて行つた。

道で、手紙が目につき過ぎるやうに思へた。私はそれをもう少し隠した。近づくに従つて、私はそれを一層花の中へ突つ込んだ。そして遂に、私が現場に至つた時には、私は突然それを花束の真中へ非常に深く突つ込んだので、外からは少しも氣が付かなかつた。私の頬は實際真赤に成つた。私は手で顔を隠してすぐにかげ出し度く思つたが、彼女は私がそれを集めた事もすつかり忘れたかのやうに私の花を見た、無意識で、殆んど目も呉れずに、彼女は手を出して、私の贈物を受け取つた。然しすぐにそれを私がその爲めに彼女に渡したかの如くに、席の上に置き、思ひに沈んだ様子で、又眼を本に落した。私はこの不運に際して、今にも泣き出しさうだつた。「私の花束が彼女のそばにありさへしたら」と私は考へた。「彼女がそれを忘れてしまひさへしなければい、が！」私は餘りへだつて居ない草の上に横に成り、右手を頭の下に入れ、ねむく成つたといつたやうに眼を閉ぢた。然し私は眼を彼女に据えて待つて居た。

十分間經過し、彼女は益々青ざめて行くやうに思へた……幸運にも感謝す可き偶然が私を助けに来た。

これは仕合せにも長閑なそよ風に運ばれた大きな、金色の蜜蜂だつた。それは初め私の頭の上でぶ

ん／＼いつて居て、それからエム夫人のところへ飛んで行つた。彼女はそれを一二度振り拂つたが、蜜蜂は益々しつこく成つた。遂にエム夫人は私の花束をつかんでそれを私の顔の前で振つた。その時手紙が花の間から離れて、開いた本の上に眞すぐに落ちた。私は跳び立つた。暫らくエム夫人は仰天して啞然とし先づ手紙を次には彼女が手に持つて居た花をきよ／＼眺め、自分の眼を信じる事が出来ない様子だつた。忽ち彼女は顔を赤らめ、跳び上り、私を見た。然し私は彼女の動作を認得して、眠つて居る風を装ひ、しつかり眼を閉じた。どんな事があつても、その時私は彼女の顔を眞ともに見やうとはしなかつた。私の胸は村の男の子につかまつた鳥の如くに波打ち、躍つた。眼を閉ぢた儘で居る居たのか私には覺えがない。遂に私は思ひ切つてそれを開いた。エム夫人は熱心に手紙を讀んで居り、彼女のほてつて居る頬、きらめき、涙ぐんで居る眼、晴れやかな顔、歡喜でふるへて居るあらゆる容貌で、私は手紙には幸福があり、彼女のあらゆる不幸は烟の如く消散したのだと憶測した。ちつとして居られないやうな、楽しい感じが私の心を嚙り、いつ迄もとぼけて居る事が困難だつた……。

私はかの時を決して忘れないだらう！

突然、すつと向ふに、私達は人聲を聞いた――

「エムさん！ ナタリエ！ ナタリエ！」

エム夫人は返事をせず、す早く席から立ち上り、私のところへやつて来て、私の上へ屈んだ。私は

彼女がまともに私の顔を見て居るのを感じた。私の睫毛はふるへたが、私は我慢して、眼をあげなかつた。私はもつと滑かに、靜かに息をしやうと努めたが、私の心臓は烈しい動悸で、私の息を止めた。彼女の燃ゆる如き息が私の頬を焦がした、彼女は確かめやうとするかの如くに、私の顔へ一層屈んだ。遂に接吻と涙とが私の手、胸にあつた手に懸つた。

「ナタリエ！ナタリエ！何處に居るの」私達は又、今度は極く近くに聞いた。

「参ります！」とエム夫人は耳障りの好い、銀聲でいつたが、それは涙で息を止められ、ふるへ低かつたので、私の外誰もその「参ります！」を聞く事は出来なかつた。

然しその刹那に遂に私の心臓が私を裏切り、私の血全體を私の顔へ突進させたやうに思へた。その刹那に迅速で、燃えるやうな接吻が私の唇を焦した。私は微かな叫びを擧げた。私は眼を開けたが、彼女が私を日に當てまいと思つたかの如くに、すぐにかの紗の手巾がその上にか、つた。瞬く間に彼女は立ち去つて居た。私には速かに立ち去り行く足音の外何も聞えなかつた。私はたつた一人だつた……。

私は彼女の手巾を取り、狂喜でわれを忘れて、それに接吻した。暫らく私は殆んど氣違ひのやうだつた……。殆んど息する事も出来ず、草に肘突き、私はぼんやり目の前の、穀圃はたの條文しが附いた周圍の坂、日の照らすところ中、點のやうに光れる氣持の好い小山や村の間を見渡す限り遠き彼方に振れ廻つて流る、河や——燃ゆる如き空の端で煙つてゐる如く思はれた濃紺の、殆んど見る事が出来ない

森をきよろく見た、そしたら光景の揚々たる平和に鼓吹された楽しい静かさが漸次私の亂れた心に、静かさをもたらせた。私は氣樂に成り、自由に息がつけたが、私の靈全體は何かを豫期しての如く、蔽ひが私の眼から取られたかのやうに無言な、楽しい憧がれで一抔だった。豫期で微かにふるへて居る、私の驚いた心は或る憶測を、おづく、喜ばし氣に探して居た……。と忽ち私の胸はゆさぶれ何かで貫ぬかれたやうに痛み出し、涙、快き涙が眼から湧き出た。私は手で顔を隠し、草の葉のやうにふるへ、私の心の最初の意識、啓示、私の天性の最初のぼんやりした瞥見に耽つた。私の幼年はその時から終つた。

二時間後歸宅した時には、エム夫人は居なかつた。突然の事情で彼女は夫と一緒にモスコウへ歸つた。私は二度と彼女に會はなかつた。

集全一キスフーエイトスド

卷四拾第

大正拾貳年六月一日印刷
大正拾貳年六月一日發行

不許
複製

非賣品

編輯 兼發行人	フストイエーフスキ全集刊行會 右代天者 鷺尾浩
印刷者	東京市京橋區深地三丁目三十番地 川崎佐吉
印刷所	東京市京橋區深地三丁目三十番地 川崎活版所
發行所	東京市日本橋區本町二ノ八 フストイエーフスキ全集刊行會 電話本局三一二二番 電報東京四五四六番

7 12811
21

375

47

25 819

終

